

主題把握、作品構造の把握、学習効果の自覚、作品の「比較能力」—ジョルジュ・スーラ作『グランド・ジャット島の日曜日の午後』の題材実践（中学3年生における場合）—

立原慶一

ジョルジュ・スーラ作『グランド・ジャット島の日曜日の午後』を中心に、ルノワール作『ムーラン・ド・ラ・ギャレットの舞踏会』を参考作品として、2019年6月に宮城教育大学附属中学校3年生4クラス135名を対象に題材実践を行う。第一に、彼らがスーラの点描画の主題を、どのように捉えるのか。第二に、描画技法が特徴的である点描画を、彼らは作品構造的な視点からどのように分析するのか。第三に本鑑賞授業を体験してみて、彼らはそれからどのような学習効果を得た、と実感するのか。第四に彼らにおいて、二作品に関する「比較能力」はどのように働くのか。これら諸問題に光を当ててみようと思う。それによって本題材に関わる各種能力や資質のあり方を析出し、鑑賞能力との関わりを見極めてみたい。

ワークシートに現れた彼らの回答を分析することで、主題把握法として、日常的現実感、虚構的現実感、仮象的現実感、非現実感、皮膚感覚的現実感の5類型が認められた。は美的特性を感受する回数（「美的能力」と命名し、鑑賞能力と同義とする。感受回数によって序列化される）が主に中回組の生徒によって、絵の主題として感受される傾向にあった。の把握スタイルは感受回数的に高回組と低回組の二極に分化された。は高回・中回組の幅広い生徒によって、絵の主題と見なされた。

の把握スタイルはと同様に、感受回数的に高回組と低回組の二極に分化された。しかし基本的には高回組の生徒によって把握されている。は高回組の生徒によって、絵の主題として感受される傾向にあった。「美的能力」との関係を逆算すれば、研ぎ澄まされた感性の持ち主はスーラ作品の主題を、皮膚感覚的現実感と見なしたのである。

本題材にあっては作品の成り立ちが「構造化された全体（領帯性）」と、「個々の同質的な色斑（局所性）」の両契機を兼ね備える融合態として、把握される事例が見られた。そこでは美的能力の高さが注目された。それはやのそれぞれ単独解釈型に比べて、高回感受組に多くの所在が認められた。

の把握スタイルはのそれと比較して、各回組に分布する範囲は狭い。感受回数的に高回・中回組の幅広い範囲にある生徒によってなされたのである。の把握は主に中回組の生徒によってなされた。本題材実践にあって、作品の成り立ちの把握と美的能力は、正の相関関係にあることが分かった。作品を構造的に把握させるためには、彼らの美的能力を高めることに話は尽きるのである。

「技法効果」は感受回数的に高回組の生徒によって、理論的に自覚されているのが判明した。「比較成果」と「多様な解釈可能性」の把握や認識では自分の外に対象化し、なぜそうなのかを尋ねる知的な検討がなされたにすぎない。技法効果を分析的に把握できる生徒は、「作品構造の把握」を十全に行える者と重なることが分かった。美的能力と「作品構造の把握」力に関する能力の分布状況は、極めて近似している点が注目される。

美的能力が高調な者ほど、切り口が5～4項目に及ぶなど数多くの項目で比べられるなど、作品をめぐる比較能力を大いに発揮している。美的能力が低調な者ほど、わずかに2項目か1項目しか比べることができないなど、作品の「比較能力」が脆弱なのである。作品の相互「比較能力」と美的能力は、正の相関関係にあることが判明した。かくて鑑賞教育で広くねらいとすべきなのが、本稿が定義する「美的能力」を育成することなのである。言い換えれば、非美的な知覚の特性を基盤とし、そこから美的なものを創発させる能力に他ならない。